肺動脈狭窄および内膜床欠損の術後長期経過に関する調査

福岡大学医学部小児科　小　田　禎　一
九州大学医学部心臓外科　徳　永　皓　一
〃　田　中　二　郎
下関市心臓友の会　荒　川　二六郎

I. 対象および方法

九州大学第1外科および心臓外科で手術を受けた例および下関市心臓友の会に登録された手術例についてアンケート調査を行った。

昭和50年末までに手術を受けた症例数は次の通りである。但し( )内は住所の明らかなものの数である。

	PS	ECD	計	回収数	回収率
九　大	34(21)	25(19)	59(40)	31/40	77.5%
下　関	4	1	5	5/ 5	100%

II. 結　　果

(1) 手術時の年令は次のようである。

	PS	ECD
0～ 5才	6	2
～10	6	4
～20	7	7
～30	1	2
～40	1	0
計	21	15

(2) 術後の経過年数は次の通りである。

	PS	ECD		PS	ECD
2年	3	3	9年	2	2
3	4	1	10	3	3
4	3	1	11	0	1
5	0	0	12	1	0
6	3	1	13	0	0
7	1	1	14	0	1
8	1	1	計	21	15

(3) 在学中の例

在学中のものは PS 15, ECD 7 である。そのうち激しい運動は休むものが PS, ECD とも各2例で，他は普通にしている。

(4) 職　業

PS 5, ECD 7 が職業についているが，そのうち PS 1, ECD 5 がかなり高度の労働に従事している。

(5) 現在の運動能力

少し激しい運動をすると自覚症状を訴えるものは，PS 4 例，ECD 2 例である。手術前にくらべて活動時の症状が改善したものは PS 6, ECD 8 である。

(6) 手術の効果に関する自覚的評価

	PS	ECD
よくなった	13	11
多少よくなった	3	2
不　変	1	0
悪　化	0	0
不　明	4	2
計	21	15

(7) 術後の経過に変動があった例

PS, ECD とも各2例である。PS では，術後5年目から2年間にわたって3～4回発作性頻拍がおこり，その後7年間は消失しているもの，および術後7年間は術前と症状が変らなかったが，8年目から改善したもの（現在術後10年）がある。ECD では，術後6年目以後症状が改善したもの(現在8年)，術後半年以後改善したもの（現在3年）とがある。

(8) 現在有症状の例

PS 4 例，ECD 3 例である。それらののべ症状数は次の通りである。

	PS	ECD
呼吸困難・息切れ	1	0
動　悸	3	3
むくみ	0	0
不整脈	1	0
疲れやすい	3	2
かぜにかかりやすい	2	1

(9) 現在服薬中の例

ECD の1例だけであるが，薬の内容は不明である。

本例は動悸と疲れやすさを訴えており，少し激しい運動で自覚症状が出現する。

(10) 死　亡

死亡例はない。

III. 考察および結論

以上の調査により，PS，ECD とも術後の長期経過は比較的良好であると考えられた。回答例では，症状残存例はあるものの，ある程度改善しているものが多く，かつ悪化例がみられない。死亡もなかった。術後不整脈をみたものはＰＳの１例（一過性の発作性頻拍）だけであった。

PS および ECD では，術後長期経過が比較的良好で，管理上も問題が少いものと思われる。

肺動脈弁狭窄症

――術後予後調査――

東京女子医科大学・日本心臓血圧研究所
内科　広沢弘七郎　楠元雅子
沼賀邦子
小児科　高尾篤良

東京女子医科大学日本心臓血圧研究所に於て，1955年より1976年12月までに手術を受けた，他の重症心奇型を伴わない肺動脈弁狭窄症は190例である。最年少２ヶ月，最年長39才，平均年令は10.2才，男性111例，女性79例である。肺動脈弁性狭窄174例，弁性＋漏斗部狭窄12例，漏斗部狭窄のみが４例である（この分類では手術時漏斗部に手を加えたものを漏斗部狭窄とした)。三尖弁閉鎖不全症の診断がなされたものが14例（７％）あり，内７例にチアノーゼを認め，６例に心不全が出現している。Noonan 症候群が３例，Sick sinus syndrome が36才の１例に合併，右心症が１例にみられた。142 例に術前右心カテーテル検査を施行しており，52例では肺動脈までカテーテルを挿入し得なかった。右室収縮期圧により分けると，100 mmHg 以下が 46 例（内手術死１例)，100～149 mmHg 51 例（手術死３例)，150～199 mmHg 37 例（手術死２例)，200～249 mmHg 4 例，250 mmHg 以上４例である。後二者の群では手術死亡はみられていない。最高は 290 mmHg の 12 才の男性で，肺動脈圧 20 mmHg であったが，肺動脈弁切開（弁口 3 mm）のみにより，術直後右室圧 160 mmHg に下降，術後２ヶ月のカテーテル検査では，右室圧 80 mmHg，肺動脈圧 18 mmHg と良好な経過をとっており，現在24才で生存が確認されている。

この間の手術死亡は９例(4.7％）であった。手術死亡を除く 181 例に予後調査をアンケート郵送により行ったが，返信の得られたものは 118 例(65％）で，うち遠隔死が１例にみられた。アンケートの返信が得られなかった63例については戸籍調査を行い，27例の生存を確認し得たが，残り36例（19％）は生死不明である。回答者の内訳は，男 71 名，女 47 名で，術後経過年数は１年から22年まで，平均 10.1 年であり，生存者中最高年令は，現在52才の男性である。アンケートの回答は経過年数により集計したが，１年から５年未満13名，５年から９年37名，10年から 14 年 47 名，15年から 22 年 21 名であったが，各群に予後に関して特に差はみられなかった。大多数のものが，術後経過良好であり，重症度―現在の身体の調子―は，解答者 113 例中 102 例（90％）は日常生活，仕事・運動とも普通にやると答えており，Ⅱ度（軽い仕事では症状なく激しくするとあり）と答えたものは10例（９％），１例はⅢ度（少し動いても症状あり）と答えている。術後重症度の改善したものは回答者 74 例中 54 例（73％），不変のもの20例（27％）である。悪化したものはいない。現在心臓病らしい症状があるものは，107 例中26例（24％）であるが，動悸，風邪にかかりやすいと答えたものが多かった。チアノーゼありと答えたものが２例にみられた。この内で治療を受けているものは１例のみである。患者自身による手術効果の判定では，よくなったと答えているものは，113 例中 91 例（31％），多

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Ⅰ.対象および方法

九州大学第１外科および心臓外科で手術を受けた例および下関市心臓友の会に登録された手術例についてアンケート調査を行った。

昭和 50 年末までに手術を受けた症例数は次の通りである。但し(　)内は住所の明らかなものの数である。